ウルリム
響
生野

特定非営利活動法人
聖公会生野センター機関誌
第58号
2013年11月20日発行
題字：康秀峰

URL http://www.nskk.org/province/ikuno　E-mail:nskkikuno@gmail.com　聖公会生野センター　検索

＝時のしるし＝ ヘイトスピーチと表現の自由

香山洋人

今年10月、京都地裁は「在特会」によるいわゆる「ヘイトスピーチ」に対して、人種差別撤廃条約が禁じる人種差別に該当する、と認定した。「ヘイトスピーチ」は単なる悪口ではなく、人種、性別、宗教、性的指向などを理由に相手をおとしめ、差別や暴力をあおるような言動のことだ。ヨーロッパ連合などではすでに法的な規制があると。おそらく「在特会」の側は「表現の自由」を根拠に法廷で争うに違いないが、東京都知事を始めこれまで多くの政治家が「ヘイトスピーチ」を是認して来た根拠も「表現の自由」だった。

しかし「表現の自由」は言いたいことを言う自由ではなく、原点は「知る権利」だ。「知っている人」が「知らない人」に重要なことを伝えるのは当然だ。例えば放射線がどのくらい拡散しているか、地震や水害時にどの地盤が危ないのか、食品添加物やアレルギー物質など、自分の運命に関することについて知らなくていい人などいるはずが無い。「知る権利」が生きるためには「知らせる人」が必要だ。だから知っている人はそれを知らせる権利、いや、道徳的義務があると考えてもいい。政府や企業に都合の悪いことでも、多くの人間の運命に関することを包み隠さず表現する権利がある。内輪のルールを破る「内部告発」が多くの人を救ってきた。「知る権利、知らせる義務、そして表現の自由」、このセットが大切な意味を持っている、と思うがどうだろうか。

「ヘイトクライム」はそのどれにも当てはまらない。言葉による暴力は表現の自由ではない。「フランス革命宣言」に「自由とは他人を害しないすべてをしうることである」と書いてあった。つまり自由の出発点は、ひとさまとの関係を良好に保ちたい、みんなで仲良くやっていこうという気持ちであり、それこそが自分自身がよりよく生きるための最善の方法なのだ。この前後には「人権蔑視は公共の不幸と政府腐敗の原因だ」とも書いてあった。情けは人の為ならず。ひとさまを大切にすることで自分の人生も明るくなるものなのだ。

インターネットは「表現の自由」に対する曲解を増産した。匿名で、特定の相手を繰り返し侮辱し、脅迫し、差別し、攻撃する。攻撃者は全能感に酔いしれ行動を加速させる。遠隔地から無人爆撃機で人々を殺戮するロボット戦争を連想させる。法的規制の有無にかかわらず、そんなことをする人々はすぐさま社会的に非難され相応の制裁を受けてしかるべきところだが、今の社会は「黙認」というOKサインを出していないだろうか。「言い方はひどいが気持ちは分かる」という支持者たちに、裁判所の判断は無力だ。オリンピック前に恥ずかしいから止めさせようというのではない。名指しされた在日コリアン、子どもとその親たちの恐怖と心の傷を思うからだ。

「兄弟に『ばか』と言う者は、最高法院に引き渡され、『愚か者』と言う者は、火の地獄に投げ込まれる」（マタイ5:22）。言葉づかいが問題なのではない。人間を侮辱して平気でいられるような人間に対し、イエスは怒りを隠していない。

（かやま　ひろと　司祭　東京教区千住基督教会牧師）

＝韓国からのお便り⑳＝

私と『高麗人』の出会い

松山　健作

出会いがあれば、別れもある。別れがあれば、再会もある。韓国で暮らしてはや３年。多くの人に出会ったし、別れもあった。そして再会もある。

私の友人にカザフスタン国籍の韓国人がいる。彼は自分のことを「高麗人」という。韓国でも彼ら彼女らに対して一般的に「高麗人」という言葉を使っている。簡単に説明すると、日本にも在日コリアンがいるように中央アジアにもコリアンが多数生活している。私の友人は、まさにその一人なのだ。

彼とは2009年、私が韓国に交換留学している時に出会った。一緒に韓国語を学んだ中である。一緒に学んでいると決して真面目とはお世辞にも言えない友人だ。しかし、何か通じるものがあり、お互いにできない韓国語でコミュニケーションを交わしながら、二週間に一度ぐらい飲んだり食べたり、公州に旅行に行ったこともあった。彼に誘われたときは、必ず数人のロシア人、そして高麗人に出会う。私はそこで20～30人ぐらいの高麗人に出会っただろう。ただ今でも連絡を取るのは彼だけだ。

2013年に入って私は、コリアンの移民について強く関心を抱くようになった。私は主に日本帝国が朝鮮半島の植民地支配を強いた時代に関心をもっている。この時代を前後に朝鮮半島に住む人々は多数の移民あるいは亡命した歴史をもつ。それらは比較的独立運動に熱心で、また運動を展開できる環境にあった。アメリカ本島、ハワイ、旧満州、ロシアに移民したコリアンの歴史を辿る中で日本帝国の植民地がそれらの人々に何を引き起こしたのかということを考えながら「ハッ」と思わされたことがある。それは私の高麗人の友人のことであった。彼らはまさに日本帝国の植民地支配によってロシアに越境していったコリアンで、独立運動を展開していた子孫なのだ。それらの初期の移住先は朝鮮半島に程近いウラジオストック付近のいわゆる沿海州が中心でロシアの独立運動中心地もこの辺りである。ロシアのコリアンは祖国の独立を願い1904年に始まる日露戦争にも積極的に参与している。伊藤博文を射殺したことで有名な安重根（アンジュングン）もこの地域で活動した親露的独立運動家の一人だ。

高麗人３世の友人OLEGと私、彼が2012年カザフスタンに帰国する前日

このようにしてロシアに居住するコリアンは1920年頃まで積極的に独立運動を展開することができた。しかし、次第にロシアのスターリン共産政権が幅を利かせ同胞社会は圧迫されるようになり、1937年には沿海州からコリアンが中央アジアに強制移住させられたのである。このロシアに居住したコリアンの研究は1990年代から資料が発掘され、現在進行中であるため、なぜコリアンが強制移住させられたのかの明確な理由は明示されることが少ないが、祖国独立が見えない中で親日に転向するコリアンを輩出させないようなスターリン政権の意図が見えるのである。また一方で強制移住させられたコリアンの中で活溌に独立運動を展開した指導者たちはさまざまな容疑をかけられ、スターリン政権下で処刑されたのである。日本帝国の「植民地」が引き起こした事柄は、決して日韓だけのあいだで捉えることのできない要素を含んでおり、近隣のロシア、中国あるいはアメリカなどを含めて考えなければ捉えることのできない大きな枠なのである。

このような歴史の連続の中で現在の私たちが存在し、またかつて殺し合い、憎しみ合い、苦痛を強いた子孫が現在において、再び出会うという体験をするのである。私の友人である彼が留学を終えカザフスタンに帰国したが、また10月中旬に出張で訪韓した。歴史の中で起こる「再会」と現在の私たちが再会する、その意味の違いと「出会い」の深妙さに感嘆せざるにはいられないのである。

（まつやま　けんさく　韓国在住）

＝今に続く「歴史」＝

在日朝鮮人と名前

川瀬　俊治

이름（イルム・名前）をロゴ化した落書・ソウルにて

多くの在日朝鮮人が自らの本名を名乗れず通名で生活している原因はどこにあるのでしょうか。歴史的側面、政治的側面、慣習的側面の３つに見出されるでしょう。

あまり知られていない歴史的、政治的側面の事例を出しましょう。独立運動史研究に生涯を捧げてきた韓国歴史学会の元老趙東杰（チョドンゴル）先生の例です。1932年に生まれた慶尚北道英陽郡（ヨンヤン）日月（イロル）面チュシル邑は集団で創氏改名を拒否した村です。趙先生はインタビューで「創氏改名を拒否したのはわが国では私の村だけでしょう」と答えています（金孝淳（キムヒョスン）『歴史家に聞く』）。趙先生は村の大人たちが話合い改名を拒否したといいます。「拒否の中心人物は弾圧を受けました」ともインタビューで応じています。趙先生は当時８歳。本名で国民学校に通ったことで教師からよく罰せられたといいます。

この事実は何を意味するでしょうか。村の大人たちの決断と行動（政治的行動）により趙先生は本名のまま学校生活を送れたのです。植民地支配の強圧体制の中、大人たち、つまり指導層の行動は子孫に影響を及ぼす民族的、人間的矜持を守ったといえます。つまり指導層の政治的な選択が本名問題でも大きなウエートを占めているということです。

戦後日本の指導層は植民地遺制を払拭する行動を残念ながらとりませんでした。さらには公的な身分証明（印鑑登録）や私有財産の証明（不動産登記）などで日本名使用を認めるなど公的保障までしてきました。慣習として横すべりすることを日本政府が追認してきたことにほかなりません。

一方、学校の先生たちは本名問題に取り組んでこられました。日本の学校で学ぶ在日朝鮮人の児童、生徒に対する「本名を名乗り呼ぶ運動」がそれです。ただ学校を出ると、通名への無言の圧迫がかってきます。その社会的圧力は植民地支配の反省がなおざりにされてきたことに見いだされます。植民地遺制が社会意識に、社会秩序に再編されているのです。

さらにその源をさぐると戦後在日朝鮮人が日本国憲法の枠外におかれてきたことに辿り着きます。国民国家である日本人の枠組みが、植民地支配の遺制に気に留めることなく、また経済政策優先が植民地支配責任にも頬かむりしてきました。日本社会に根強く存続する朝鮮人排斥が克服されずにきたことは、まさしくヘイトスピーチの温床となっているのです。

日本は明治時代、家制度を支配の末端に食い込みました。戦後、家制度は解体されましたが、「家破れて氏あり」とある憲法学者が戦後の民法改正を嘆いたように、同氏同戸籍のもと、戸籍筆頭者（氏を名乗る人）が95パーセント男性であり、パートナーの女性は夫を「主人」と呼ぶことが多いのです。家制度は解体されましたが、家の代わりに氏の「支配」になりました。通名を名乗る朝鮮人に対して「日本人のようだ」と投げかける言葉は、日本人のような氏を「戸籍筆頭者が名乗り、パートナーも同じ氏だ」とみているのです。朝鮮人の名前（姓）は日本人とは異なり、女性が結婚しても姓が変わるわけではありません。「人間的存在に根拠」（伊知地紀子）であるだけに、その根拠を日本人は反省もなく否定していることに戦慄を覚えて当然でしょう。そしていまもなお植民地支配やその遺制に鈍感ななか大日本帝国の精神が慣習として滑り込み、脈動、再編されているのです。

（かわせ　しゅんじ　ジャーナリスト）

デイ・サービスセンター「くりんモダン」の働きと私の思い②

＝多様な楽しみを提供して＝

芦田　聡

私が聖公会生野センターの事業であるデイ・サービスセンター「くりんモダン」（以下デイ・サービスセンター）を担当させて頂きまして早６年が経ちました。前回も活動内容は紹介させて頂きましたが、初めてお知りになられる方もおられるかもしれませんので、再度活動内容を紹介させていただきます。

デイ・サービスセンターでは、主に障がい者の社会参加や憩いの場作りに取り組んでおり、知的障がい者、精神障がい者を中心にご利用頂いております。活動としては主に①美術活動②音楽活動③余暇活動④宿泊体験⑤生活訓練の５本を柱にしております。私がデイ・サービスセンターを担当させて頂いた初年度は長屋風の建物で、音楽活動や、宿泊活動を行うことはできなかったのですが、現在はそれらの活動ができるスペースを関係者の皆様方に与えて頂きました。のびのびと活動することができるようになり、当事者の方々にもご満足を頂けているかと思います。

最近では音楽活動が活発になっており、①作曲を勉強したいと来られる方々、②ジャムセッションをしたい方（私も含め毎週ジャズのセッションを行っております）、等々、音楽好きな方々が集まるようになってきました。作曲を勉強したいと集まられる方々は、昔から興味はあったけど、なかなか機会に巡り合えなかった等の理由で来られる方が多いです。少々難しく気持ちが折れてしまう時もあるそうですが、気長に向き合う事で少しずつ理解できるようになったと大変喜んで頂いております。ジャムセッションをしている方々は、過去にも音楽経験を豊富にされている方々ばかりで、私自身毎週大変貴重な時間を過ごさせて頂いております（３年後ぐらいにはコンサート荒らしになる予定）。

さらに直近ではお芝居をされる方も来られるようになり、芸術関係の方々が多く関係をもてる場所になっていきそうです。

前回紹介させて頂いた時よりも、随分と各活動内容が深化していっているように感じます。過去の活動や反省を踏まえ、今後も当事者の方の活動充実及びスタッフのレベルの向上をモットーに活動を続けていけたらといいなぁと考えております。

最後になりましたが、当然私一人の力では、成し遂げることができないことも多々ありますので、その節は皆様方のお力添えの方よろしくお願い致します。

（あしだ　さとし　聖公会生野センタースタッフ）

李　栄汝　「若紫の無窮花」（三一書房）

磯貝 治良

〈在日〉文学の女性作家・詩歌人の名前は、1960年代までは３本の指におさまるほどしか見られなかった。70年代に入って希少な詩集、小説集が現われて、80年代には活況を呈する。90年代以降に新しく登場する世代の〈在日〉文学は、女性のほうが盛んな印象を与える。

〈在日〉社会における女性の教育・地位・意識などの変容が表現活動の意欲に結びついたからだろう。『若紫の無窮花』は〈在日〉女性の三代記を刻んで、その時代と価値観の変容に見合っている。

祖母のチュンシルは15歳で済州島から渡日して、異郷暮らしで頼る寄る辺はカネ、と信じている。男子出産信仰や祭祀（チェサ）などの習俗を生きる杖にしている。

母のファジャは夫（チュンシルの息子）家族とは異文化に近い慶尚道出身家族の美しい人だが、男子出産という姑の望みを果たすために病弱の身を損なう。彼女もまた、クンメヌリ（跡継ぎの嫁）の役割に執着して、人生の多くを犠牲にする。

その娘チョンミ（泉美）が小説の語り手だ。彼女は〈在日世代〉の女性として祖母／母の生きかたに反発する。反発の出どころになっているのが、みずから学び取った〈女性解放〉の思想だ。

しかし、反発心は単純ではない。祖母や母の歴史と人生の手法をむげに切り捨てることができないからだ。反発には痛みと恋慕が絡まる。葛藤するチョンミの気持の変遷が小説を成立させている。〈在日〉女性三世代のなじみの日常を写実するだけでは小説にはならない。

三世代の確執がもたらす葛藤は痛切だけれど、つながる心は理屈では切れない。それが三世代を結ぶ、したたかユーモアかも。祖母チュンシルと孫・泉美のこんな会話がある。

「おまえは、おばあちゃんと一緒や。コツコツ貯めよる」

「おばあちゃん。お金はいつも行く所があるねんで。貯めててもお金持ちにはなられへん」

「しやけど、自分がお金持ってること、旦那さんにも子どもにも言いなや」

「それは、うちの勝手やろ」

「泉美はお金に上品やなぁ」

「だって昔、おばあちゃんの財布からお金盗んだことあるやろ。中学三年生の夏休みにアルバイトして返したけど、あのとき決めてん。絶対に人のお金に手をつけへんって。苦しいもん」

「あの時のおかげか。しやけど返してくれたお金、五千円足らんかったで」

「覚えてるよ。その分、結婚してからお小遣い渡して来たやろ。チャラやで」

「ほんまや、ほんまや」

フェミニズムの〈知恵〉と、在日を生きしのいできた〈実在〉とは、勝負は付かないのかもしれない。

作者は一作を残して2012年５月に夭逝した。

『若紫の無窮花』は構成と文体において、小説ゆえのリアリティを充分に持ちえたとは言えない。けれど、あらたな〈在日〉女性作家の登場を期待させた。父が異郷で働いて済州島に買った土地をめぐる親族とのあつれき。父の骨は墓から掘り出されて日本に戻る。それは国と切れることを意味したのだが、作者が生きていたなら、どんな〈在日〉の物語を紡ぐことになっただろうか。

（いそがい　じろう　在日朝鮮人作家を読む会代表）

＝センター写真あれこれ＝

余韻

■クリンもだん美術展は今年は日韓障がい者美術展としてしいます。シンポジウムで障がい者の表現の可能性について論議。講師の二人の発言が印象深い「障がいがあるないは違いと思う」「存在そのものが表現です」。簡単な言葉だが実践を踏んできた二人の言葉だけに深い意味を感じた。■シカゴから福祉の研修団が生野に来た。民族差別と人種差別の違いはあるが日本とアメリカの実践の違いに少々驚いた。日本はまだまだ課題が多すぎる。シカゴというと70年代のロックバンド「Chicago」そして映画「ブルースブラザーズ」が懐かしい。その話をしたら訪問者たちが喜んだ。やはり共通の楽しい話題はいいものだ。■今年もあと少し、いつの間にか四捨五入したら60歳になっている。無理のできない齢に突入しつつあると自覚せねば・・・(ピックアンチャ)

お詫びと訂正

前号（第47号）の本の紹介「クロンビの歌を聴け」で出版社が講談社になっていました。正しくはかんよう出版です。お詫びして訂正いたします。

メールアドレス変更のお知らせ

メールアドレスが不調のためアドレスを
nskkikuno@gmail.com に変更いたします。
ご迷惑をおかけしますがよろしくお願いします。

聖公会生野センターへのご支援をお願いします

◇正 会 費　年額　1口 10,000円
◇後援会費　年額　1口　3,000円から
・郵便振込00910-1-321780「聖公会生野センター」

◇自由献金・クリスマス献金
・郵便振込 00910-1-321780「聖公会生野センター」
・銀行振込 三菱東京ＵＦＪ銀行 東大阪支店
普通預金　4654965「特定非営利活動法人聖公会生野センター」

発行所：聖公会生野センター
〒544-0002
大阪市生野区小路3丁目11番19号
TEL06-6754-4356/FAX06-6224-7869
E-mail: nskkikuno@gmail.com
http://www.nskk.org/province/ikuno
発行人：大　西　　修

ウルリムは再生紙を使用しています。